人文科学研究

—第 11 号—

目 次

◆2013 年度修了者修士論文要旨 1

◆院生会組織 7

◆2013 年度院生会活動記録 8

◆『人文科学研究』投稿規定 10

2013 年度修了者修士論文要旨

【言語文化専攻】

丸山　沙織　　**述部構造再考**

田村　友佳　　**ジャック・プレヴェール研究**

赤羽　佑太　　A Cognitive Approach to English Education
：A Study on *Be-to* Infinitive

脇淵　亮太　　Applying Congnitive Linguistic to English Teaching
：A Study on Will

述部構造再考

丸山　沙織

本論はナイという形態素を足掛かりとして、述部の構造を再考するものである。ナイをめぐる問題点は多岐に渡る。これは日本語の述部全体に関する問題とも連繋している。本論は形態・構造を重視する立場を取り、ナイ（ナイ述語文）及び述部全体の構造を再考することを目的とする。

第一章では、ナイの分類に関する問題を扱う。従来、ナイは複数のカテゴリ（非存在を表す形容詞、否定を表す助動詞、否定を表す補助形容詞）をまたぐものとして捉えられている。この分類の論拠として挙げられているのが、「動詞＋ナイ」と「形容詞＋ナイ」の統合度の差異である。当章ではこの処理に対する疑問から、ナイの統括的な説明を試みた。ここでは動詞に後続するナイ（助動詞）と形容詞に後続するナイ（形容詞）との間に形態的な差異がないことを承接関係から確認する。また、従来「動詞＋ナイ」と「形容詞＋ナイ」の統合度の差異は、従来ナイによると捉えられていたが、実際は前部要素にある品詞によって生じる差異と考える。ここで本論が提出するのは〔X-ナイ〕というモデル構造である。X に入るのは、動詞の未然形あるいは「φ」である。つまり「動詞＋ナイ」は〔動詞-ナイ〕（＝一つの形容詞的まとまり）という構造を取るのに対して、「形容詞＋ナイ」は〔形容詞〕=〔φ-ナイ〕（＝連用修飾）という構造となる。非存在を表すとされるナイも、〔X-ナイ〕のうちの〔φ-ナイ〕の用法によって統括的に説明することが可能となる。

続いて第二章では、第一章から派生した問題としてナイの分類（品詞）について論じる。先行研究の多くでは〔動詞-ナイ〕は動詞の派生やカテゴリの一つとして考えられており、核は前部要素である動詞に認めていた。本論では前章の論を踏まえた上で、〔φ-ナイ〕という独立的な用法があることをまず重視する。動詞を核とすると〔φ-ナイ〕における中心部は無核となってしまうが、述部の核となる部分が存在しないとは解しづらい。また、ナイに前接する動詞の未然形が独立用法のない、非独立的な形態であることを先行研究から確認する。これらから、〔動詞-ナイ〕の核はナイにあるとした。ここから、動詞を先頭とした述部の核が必ずしも動詞に認められるわけではないということも提示した。但し、-タイやラシイといったナイと同じく形容詞型の活用を有する述部構成成分がナイ同様単独用法を持っているわけではないため、多くは動詞に核が認められるのも事実である。

また、第三章では、連用修飾をめぐる意味と構造との齟齬を論じた。第一章で〔形容詞〕=〔φ-ナイ〕が連用修飾の関係になっているとしたが、ここに意味との齟齬が生じるため、連用修飾（副詞的用法）にまつわる構造と意味との齟齬を形容詞連用形の用法から論じた。先行研究によって、（連用）修飾は異なる観点から説かれているということを見た上で、構造から連用修飾という文法現象を見ることを提言する。

さらに第四章では、前部要素に重きを置くという観点への批判と、述部構造を「命題＞モダリティ」という順序と見る先行研究に対する疑問として、述部構造の承接関係の順序を、述部の品詞性とともに論じる。まず格要求は、述部の品詞性を見る上で指標とはなり得ないことを確認する。そして改めて述部構成成分を見ることで、述部は　動詞型＞形容詞型＞〔名詞＋ダ〕型　という順序から成っていることを見ていく。当章はこのように、述部をより大きな枠で、そしてシンプルに見ることが可能となる形態的な観点を指摘した。

ジャック・プレヴェール研究

田村　友佳

ジャック・プレヴェール（1900-1977）は、20 世紀フランスにおいて最も大衆の人気を博した詩人である。彼は詩作品のみならず、劇や映画の脚本、あるいはシャンソンやコラージュ作品など、多岐に渡ってその才能を発揮し続け、1946 年の愛娘ミシェルの誕生以降は、イラストや写真を伴った短編作品も手がけている。中でも 1952 年にガリマール社から出版された *Lettre des　î les Baladar*『バラダール島からの手紙』は、童話として書かれた作品ではあるが、人知れずのどかに暮らしていた島民が、その島に眠る黄金を狙われて、大陸の強欲な文明人たちに危うく搾取されそうになるという、植民地主義を風刺した物語に他ならない。

本論は、そこに窺える、他のプレヴェール作品にも通底するテーマやメッセージをより深く理解するためにも、詳細な分析を通して、本作品の持つ重要性とともに、作者の思想と文学技法を明らかにしようとするものである。まず、童話や旅行記の関係を見た後、植民地主義をめぐって、彼が一時期係わっていたシュルレアリストたちとの関係、さらには当時の時代背景などを考察した。この作品には、メルヒェンやおとぎ話のように多くの動物が登場し、また旅行記に見られるように、未開の島を舞台に幸福な生活が描写されるなど、確かに子どもたちが親しみやすい童話としての側面があることは間違いない。一方、本作品で風刺される帝国主義や戦争の愚劣さ、それに対する反発は、植民地支配からの解放を求める民族自決を擁護する世論が高まる以前から、プレヴェールの作品に既に窺われることであり、彼の一貫した信念であったことが分かる。また、登場人物の台詞や描写の端々からは、当時大きな社会問題となっていたインドシナ戦争やアルジェリア戦争への当て擦りも窺える。

また、テクスト全体に多く見出された言葉遊びを細かく分析してみると、プレヴェールは、類音や類語の反復、諺や熟語の捩り、実在した人物や事件のパロディーなど様々な技法を駆使することで、植民地主義だけに留まらず、社会全般に蔓延る弱者に対する差別意識、権力や教義を振りかざす圧制者への揶揄や痛烈な批判を暗示していることが分かる。とりわけ、シャンソンを随所に挿入し、そこにシニフィアンの戯れを加えることで、テクストに形式上の変化を持たせながら、自身と登場人物の想いを効果的に表現している。

島名「バラダール」に関しては、その発音からマダガスカルやバレアレス諸島などの実在する島を想起させるだけでなく、強制や束縛とは無縁な自由気ままな放浪を想起させる《 balader 》という動詞とのイメージ連鎖が働き、定めなく海に浮かび自然と共生するこの島の豊かさや、プレヴェールの諸作品に一貫して窺える特徴をも表しているように思われる。また、テクストと同時進行で描かれたアンドレ・フランソワによる挿絵は、エアメール便を模した表紙から末尾のイラストに至るまで、こうしたプレヴェールの言葉遊びや風刺と絶妙に融合し、本作品により滑稽さと辛辣さを加えている。

このように遊び心に満ちた視覚的、音声的要素による仕掛けは、読者の注意を惹きつけると同時に、植民地主義、不当な差別や偏見、権力の横暴や自然破壊など今日的かつ重い話題でありながらも、軽快に読者を物語の世界へと誘う。プレヴェールならではのこの独創的な作品は、彼が当初構

想していた「子どものため」であるだけでなく、文明や科学の進歩を追い求め続けた結果、環境破壊をはじめ様々な問題を抱えた現代社会に生きる我々にとっても、意義深く示唆的な作品であるに違いない。真の豊かさやよりよい社会の在り方を見つめ直すためにも、我々は本作品に再び触れてみるべきではないだろうか。

A Cognitive Approach to English Education
：A Study on *Be-to* Infinitive

赤羽　佑太

本論文では、現在の日本の英語教育の中で扱われる *be-to* 不定詞がどのように扱われているのかを概観し、その中で浮上した問題点を克服するような教授法を考案し、*be-to* 不定詞と他の未来表現との比較を行いつつその教授法に実際にどれほど教育効果があるのかを示す。そのために、*be-to* 不定詞がこれまでにどのような観点から研究されてきたのかを概観するとともに、それらの先行研究の問題点について触れながら独自の *be-to* 不定詞の意味解釈モデルを示す。

まず、現在中学校で使用されている英語教科書には、*be-to* 不定詞の記述がない。そのため学習参考書および文法書を概観した結果、*be-to* 不定詞の用法は学習参考書・文法書ごとに異なることが分かった。また高校の教育現場においても *be-to* 不定詞は上記のように用法に一貫性がないため徹底した指導が行われていない問題がある。具体的には、*be-to* 不定詞の主要な五つの用法の使い分ける手段を記述しないまま語呂合わせで覚えるといったようなものであるため、*be-to* 不定詞の意味及び用法を理解し自ら用いるといったアウトプットが非常に難しい現状にある。ここで問題になるのが、そのような一貫した指導がとられない中でも *be-to* 不定詞は主に未来表現の一種として扱われる点にある。生徒が*He will be to become President.(cf. Sugayama 2005) のような非文を書いてしまうのも、このためと考えられる。また、*be-to* 不定詞が持つ主要五つの意味「義務」「予定」「運命」「可能」「意図」といった意味は *be-to* 不定詞固有の意味ではないために生徒は *be-to* 不定詞の用法を理解しにくいと考えられる。

be-to 不定詞は多義的な未来や義務の表現方法であるため、*be-to* 不定詞の先行研究は非常に多くある。それらは大きく三つに分けることができる。一つ目は辞書のように *be-to* 不定詞の使用されている文の意味を歴史的に表れてきた順にリストアップするものである。二つ目は *be-to* 不定詞を *be* の部分と *to* の部分に分けそれぞれの語が持つ特性によって説明しようとするものである。三つ目は *be-to* 不定詞は部分でなくこの形であることに意義があるとするものである。それぞれに優れている点はあるものの、これらの先行研究ではなぜ *be-to* 不定詞に様々な用法が挙げられるのかを説明することができていない。

本論文の立場は中心義を定めるといった点で先行研究の三つ目のグループと同様であるが、論文中で取り上げた Chang(2012)とは異なり、本論文では *be-to* 不定詞の中心義(core meaning)を「to＋動詞の原型が示すイベントの現状である：確定状態」であるとし、文中の他の要素（行為者と動詞の時制）との関係により *be-to* 不定詞が多様な用法を持つことを示す。その他に、*be-to* 不定詞がそもそも未来表現と捉えられる理由についても説明する。加えて、他の未来表現との意味の違いも説明する。

以上のように説明されるものを図でまとめたものを用意し、信州大学 1 年生を対象にこの意味解釈モデルを用いた教授法と従来の教授法を使用した授業を行い、その後テストを実施した。その結果、本論文が提案する教授法の授業を受けた生徒の方が従来の教授法の授業を受けた生徒よりもテストにかかった平均時間が短縮するとともに平均点が上昇していた。このことから本論文が提案する、*be-to* 不定詞の中心義(core meaning)と文の他の要素である用法誘導条件との関係から文の意味を理解できるモデルを用いた教授法に十分有効な教育的効果があると結論付ける。

Applying Congnitive Linguistic to English Teaching
：A Study on Will

脇淵　亮太

本論文では、現在の日本の英語教育の中で扱われる助動詞 *will* がどのように扱われているのかを概観し、その中で浮上した問題点を克服するような教授法を考案し、その教授法に実際にどれほど教育効果があるのかを示す。そのために、*will*がこれまでにどのような観点から研究されてきたのかを概観するとともに、それらの先行研究の問題点について触れながら独自の *will* の意味解釈モデルを示す。

まず、現在中学校で使用されている英語教科書は、中学校学習指導要領にしたがって *will* が未来を表す語であると紹介している。高校でも高等学校学習指導要領に沿って、*will* が未来を表すものと、推量を表すものとに分けて指導される。ここで問題になるのが、生徒の中で *will* は未来表現であるとだけ強く印象付けられる点である。生徒が*If the boat will sink, we will get drowned. (Declerck 1984: 281)のような非文を書いてしまうのも、このためと考えられる。その他にも、辞書などで紹介されている *will* が持っているとされる各意味が、教育の場においても個別に扱われるためそれぞれに関係性が感じられにくくなっている。このことから生徒は *will* の特に未来以外の用法を理解しにくいと考えられる。

will はいわゆる多義語であるため、*will* の先行研究は非常に多くあるがそれらは大きく三つに分けることができる。一つ目は辞書のように *will* の使用されている文の意味をリストアップするものである。二つ目は助動詞が root 用法と epistemic 用法を持つとの観点から、*will*にも両用法があるとするものである。三つ目は *will* の意味は一つであるとするものである。それぞれに優れている点はあるものの、これらの先行研究ではなぜ *will*に *Cobuild*が挙げるような複数の意味があるのかを説明することができていない。

本論文の立場は先行研究の三つ目のグループと同様であるが、論文中で取り上げた上野(1991)とは異なり、本論文では *will*の核意味(core meaning)を「その命題を話し手が頭の中で真実であると考えているだけ」であるとし、文中の他の要素（主語の人称と動詞の種類）との関係によりまず文の表す意味が「意志<INTENTION>」であるか「推量<INFERENCE>」であるかに分かれることを説明する。さらにそのそれぞれに対して様々な文脈が重なることで *will* を含む文が多様な意味を表すことを示す。その他に、現在形との違いから *will*が未来を表す文中に使用される理由についても説明する。加えて、他の未来表現との意味の違いも説明する。

以上のように説明されるものを図でまとめたものを用意し、信州大学 1 年生を対象にこの意味解釈モデルを用いた教授法と従来の教授法を使用した授業を行い、その後テストを実施した。その結果、本論文が提案する教授法の授業を受けた生徒の方が従来の教授法の授業を受けた生徒よりもテストにかかった平均時間が短縮するとともに平均点が上昇していた。このことから本論文が提案する、*will*の核意味(core meaning)と文の他の要素である意味誘導条件との関係から文の意味を理解できるモデルを用いた教授法に十分有効な教育的効果があると結論付ける。

信州大学大学院人文科学研究科　院生会組織

院生会長（1 名）
院生会統括（院生会の意見総括、院生総会開催、大学院委員会との連絡、各行事幹事、連絡事項管理）

会計（1 名）
院生会費管理（会費徴収、物品購入、収支報告）

書記（1 名）
記録類作成及び管理（院生会議事録、院生会活動記録）

シンポジウム委員（4 名）
シンポジウム運営（シンポジウム連絡、原稿集作成・配布）

広報（1 名）
院生会活動報告（写真撮影、院生会ホームページ運営）

院生会雑誌『人文科学研究』編集委員（1 名）
『人文科学研究』編集　（雑誌作成、投稿受付）

- 任期はそれぞれ一年間とする。
- 役員は基本的に M2 から選ばれるが、シンポジウム委員の半数は M1 から選ばれる。
- 次年度役員の選出は各年度の 1 月中に院生総会を開き、そこで行う。ただし M1 からのシンポジウム委員については年度初めの院生総会において選出する。
- 役員選出は立候補及び推薦による。
- 各役職の兼務は各年度の院生会員の人数に応じて認める。
- 休学や留学等の長期の不在やその他のやむを得ない事情の場合、各役員の交代を認める。
- 役員構成及び各役員の業務内容は基本的にこの通りだが、各年度の状況に合せた変更は可能である。

平成 25 年度　信州大学大学院人文科学研究科　院生会活動記録

平成 25 年度院生会役員
院生会長　田村友佳
会計　田村由姫
書記　任意
シンポジウム委員　(M2) 中瀬将史
　　　　　　　　　(M1) 鎌田真緒
広報　任意
雑誌編集委員　丸山沙織

・・

6 月 18 日　第一回院生総会　【 於　院生室 】

議題 1. 院生会組織説明
議題 2. 前年度会計報告
・同年度予算案
・院生研究会の実施決定、及び費用について
議題 3. 大学院委員会への要望、及びシンポジウムについて
・M1 に向けて、シンポジウムの概要説明
・シンポジウム及び人文科学研究科についての意見収集

・・

9 月 26 日　信州大学人文科学研究科大学院　前期シンポジウム　【於　人文ホール】

プログラム
▼13:30－14:10 赤羽佑太　A Consideration of *be to* Infinitive
▼14:15－14:55 脇淵良太　法助動詞 will の「意味」と「用法」
▽14:55－15:10 休憩、自由討議
▼15:10－15:50 丸山沙織　述語構造再考
▼15:55－16:35 田村友佳　ジャック・プレヴェール研究
　　　　　　　　　　Lettre des îles Baladar における言葉遊びとその効果
▽16:35－17:00 休憩、自由討議、投票
▽17:00－19:00 懇親会、M1 自己紹介、人文科学研究科長賞発表（脇淵良太）

・・

1 月 28 日　第二回院生総会　【 於　院生室 】

議題 1. 来年度役員選出

平成 26 年度院生会役員

院生会長　鎌田真緒

会計　田村由姫

書記　任意

シンポジウム委員(M2)　中瀬将史

広報　任意

雑誌編集委員　鎌田真緒

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2 月 4 日　信州大学人文科学研究科大学院　後期シンポジウム　【於　人文ホール】

プログラム

▼09:30－10:10 田村由姫「優生保護法改悪阻止運動」における障害者運動との連帯

▼10:15－10:55 中瀬将史　原子力をめぐる科学者の思想史

～武谷三男・久米三四郎を中心として～

▽10:55－11:05 休憩

▼11:05－11:45 藤原隆史　An Analysis of Causative Verb Have from the Cognitive Linguistic Perspective

▼11:50－12:30 鎌田真緒　オープナー尺度の作製およびコミュニケーション参与スタイル、実際の発言頻度との関連

▽12:30－13:45 昼食、懇談、優秀発表賞投票

※修論優秀賞候補者発表

▼13:45－14:25 丸山沙織　述語構造再考―述部形成成分の承接順序からの試論

▼14:30－13:10 田村友佳　ジャック・プレヴェール研究 ～IMAGE との言葉遊び～

▽15:10－15:20 休憩

▼15:20－16:00 赤羽佑太　A Study on *Be-To* Infinitive

▼16:05－16:45 脇淵良太　法助動詞 *will* の研究

▽16:45－17:30 優秀発表賞発表、懇談（藤原隆史）

『人文科学研究』投稿規定

原稿の種類

1. 修士論文要旨
2. 後期シンポジウムにおける発表原稿
3. 寄稿論文

投稿資格

信州大学人文科学研究科に在籍する者、もしくは過去に在籍したことのある者。ただし上記 1 と 2 については、当該年度に同研究科に修士論文を提出した者に限る。

原稿審査

それぞれ審査委員会にて行う。審査委員会には院生会員のほか、必要に応じて教員も加わる。

分量

それぞれ無制限

（提出形態の詳細については、編集委員会に問い合わせること）

提出先

信州大学人文科学研究科　院生会『人文科学研究』編集委員

連絡先：jb-in@shinshu-u.ac.jp

締切

毎年二月末

人文科学研究科 第 11 号

平成 26 年 5 月 21 日 発行

編集者 信州大学人文科学研究科院生会
発行者 信州大学人文科学研究科委員会
〒390-8621 松本市旭 3 丁目 1 番 1 号信州大学人文科学研究科内